

## □ 評 論

## 大 坪 盛

今年も2つの音楽評論賞の話題から始めたい。

まずは音楽批評の新人の登龍門である「柴田南雄音楽評論賞」。この賞は、「音楽評論を社会に広め、音楽文化の質の向上に貢献することのできる音楽評論家を育てることを目標として、将来期待される個人に対し、その活動を顕彰し、または助成する賞金を授与することを主旨」とするもので、アリオン音楽財団により1996年度に〈アリオン賞〉の評論部門としてスタート、2013年度から学校法人・桐朋学園に運営が移行、今年度で18回目を迎えた。本賞と奨励賞から成るが、これまで本賞受賞者が5人（内1人は2年連続受賞）、奨励賞受賞者が15人誕生している。賞の名前に冠されている作曲家・柴田南雄は、研究・評論活動も高く評価され、〈アリオン賞〉の評論部門の審査員も長くつとめた。本賞はその業績に敬意を評して創設された。

再スタートから数えて第6回目となる今回は残念ながら、本賞も奨励賞も受賞者が出なかった。文芸評論家でもある三浦雅士選考委員長は講評で受賞者なしという結果に対し、「残念という以上に困惑している」との感想を記すとともに「音楽の現状のみならず、芸術の現状について、何か深刻な地殻変動とも言うべきものが進行していると思わざるをえない。」と書いている。

日本（に限らないかも知れないが）のクラシック音楽界は、縮小し衰退していると言われており、更に高齢化が加わってきていることは以前から憂慮されてきた。そのことは昨今のコンサートやレコード店の状況からも明らかなことであろう。クラシック音楽を論ずることを目的とした評論コンテストである「柴田南雄音楽評論賞」で受賞者が出ない、あるいはその応募水準が低下しているという状況も、この傾向の一環ということを三浦委員長は指摘しているのかもしれない。

三浦委員長は更に「今回の応募作のほぼすべてにその地殻変動を広い視野に立って俯瞰する眼が欠けているように思われる。」と指摘する。「音楽をはじめとする芸術は、いまだどういふ状況にあるのか、いや現代文明そのものがどういふ状況にあるのか、批評はそういう俯瞰する眼を抜きに成立しえない。」と断言する。次回に期待したい。

音楽評論賞の双璧の一方である「吉田秀和賞」、こちらは音楽に限らず広く芸術一般が対象で、新人賞ではなく上梓された芸術論の書籍に対して授与される。2019年第29回の吉田秀和賞は沼野雄司著の「エドガー・ヴァレーズ——孤独な射手の肖像」〈春秋社刊〉に授与された。

エドガー・ヴィクトール・アシル・シャルル・ヴァレーズ（1883～1965）は、フランスのパリ生まれで、20世紀を代表する作曲家の1人。代表作には西洋音楽史初のパーカッション・アンサンブルのための「イオニザシオン」、白金フルートのための「密度21.5」などがある。沼野雄司著「エドガー・ヴァレーズ」ではこれまであまり知られていなかったヴァレーズの半生を、彼の手紙やパスポートなどの一次資料を基に書かれた本格的な評伝として評価された。その名を冠されている吉田秀和もヴァレーズに会ったことがあるとのこと。沼野は「（ヴァレーズは）ロマン派が主流だった中で、前衛的な音楽を切り開いた。ヴァレーズを通して近現代の音楽史を見ると、見え方が変わってくると思う。」と贈呈式で述べている。加えて沼野は「ヴァレーズと交流があった吉田先生の賞を頂けてうれしい。」と喜びの言葉を述べている。

審査員の磯崎新（建築家）は「感伏しています。正確な距離をとりながら、すべての原資料にあたって確認されている。まっとうな評伝です」と述べ、同じく審査員の片山杜秀は「沼野さんはこの仕事（注＝「エドガー・ヴァレーズ」）を槌にして『主流』にとつての『不都合な真実』を明らかにし、『主流』の歴史を書き換えてゆくのではないかと。今後の期待を込めて受賞作とします。」と述べている。

因に吉田秀和賞のこれまでの音楽関係の受賞者は次の通りである。（カッコ内は執筆対象）秋山邦晴（エリック・サティ）、長木誠司（フェルッチョ・ブゾーニ）、伊東信宏（ペラ・バルトーク）、青柳いずみこ（安川加寿子）、宮澤淳一（グレン・グールド）、片山杜秀（音盤）、岡田暁生（音楽の聴き方）、白石美雪（ジョン・ケージ）、推名亮輔（デオダ・ド・セヴラック）、通崎陸美（平岡養一）、立花隆（武満徹）、の11人11冊著書。

クラシックの音楽評論家、音楽ジャーナリスト、エッセイストなどの団体が日本には2つ結成されている。全国組織の一般社団法人「ミュージック・ペンクラブ・ジャパン」と関西が拠点の「音楽クリティック・クラブ」。両団体ともに年1回ミュージック・ペンクラブ・ジャパンは「ミュージック・ペンクラブ賞」、音楽クリティック・クラブは「クリティック・クラブ賞」を、演奏家、評論家、関係音楽団体に授与している。

その中でミュージック・ペンクラブ賞の「研究・評論部門」が故・磯山雅氏に贈られた。バッハやモーツァルトで類稀な研究成果を挙げ、国立音楽大学での後進の指導、学校経営、更にはいずみホールでのプロデュースなど、幅広い音楽活動を展開していた。昨年惜しくも不慮の事故で世を去った磯山氏の業績をしのぶと共に、冥福を祈りたい。

新聞の社説に「批評」の話題が取り上げられることは少ない、というより多分創刊以来初めてのことでないか。2019年4月14日の朝日新聞社説に掲載された「批評の再生」がそれである。対象は音楽批評に限ってはいないが、作家の橋本治氏が「批評的に物事を見る姿勢が後退している」と危んでいることを挙げ、「批評とは何か」を問いかけている。そして提言する。「批評は作品の良し悪しを論ずること、という一般的な理解を一步前に進めて、新たな価値を発見すること、さらにいえば、作品に横たわる、無意識まで探り当てることではないか」と。

音楽批評関係でいえば、吉田秀和、遠山一行といった言わば大衆的批評家が世を去り、残念ながら音楽批評に対する関心が低下し、新聞や雑誌におけるスペースも以前に比べれば少なくなっている。情報や話題は求めるが、価値判断や評価を必要としない音楽ファンが増えているとも聞く。新聞や雑誌も「多数派に届く情報を提供したいと考える主催者の考えも影響して、『批評はいらぬ』と考えるメディアも多い。しかし、ネットも含めてこの状況を打破したいと考えている人がいることも確かである。」前述の新聞の社説では「ここ数年、危機感をもつ中堅・若手を中心に、（批評）再生の試みが始まっている。手取り早い回答を求めがちな時代にあらがう気概を、もっと伝えて欲しい。」と結んでいる。筆者も今こそ問いたい。「本当に批評はいらぬのだろうか」と。

昨年出版された音楽書の問題を2つ。音楽ジャーナリスト、梅津時比古（桐朋学園大学長、毎日新聞特別編集委員）によるシュベールの「冬の旅」についての研究書「冬の旅 24の象徴の森へ」がドイツの出版社から「哲学・学際」叢書シリーズの1冊として刊行された。この本で展開されている、「ニーチェはワーグナーではなくシュベールの影響下にあった」という注目すべき斬新な見解が認められたものである。

もう一冊あげておこう。片山杜秀著「鬼子の歌」は、文芸雑誌に連載されたものをまとめたもの。山田耕伴、伊福部昭、黛敏郎、三善晃など近・現代の日本作曲界を生きた音楽家の作品を辿りながら、鬼才たちの周辺から核心に至るまで活写した内容で、好奇心を槌に縦横無尽に切りまくる正に博覧強記の書といえる。片山の今後の著作にも注目したい。